敎訓生業宝

玄

敎育
159
T

10126
教科書文庫
1
101
10-1824
01304
49354

教育学科
広島大学図書印
広島大学図書
0130449354

教訓生業宝巻之三

一 千両茶碗
一 無間鐘訣
一 負而勝説
一 百年之計
一 詩則甘露

林氏記

一 器量之程

千両茶碗

万金の分限者あり。茶乃湯をこのみ。古筆古画をかひ求めてやまず。又名物乃茶碗を千金にて買んとす。手代が云。客乃求めんとのぞまば其茶碗は幾倍乃妙徳ひや。主人此云。其妙徳はおもはざれども。むかしより名物乃義名世にまぎれなき。世間

に稀なる物なれバいとゑんとさみなるゝ。其代が
云。古人乃詞にハふるきを翫び器物ハ新らし
きを用ゆとなり。人乃年老を経るものハ是非
善悪乃事に見覚する事多く熟するをもつて
万事乃ゑさぶきにあやまつ事なきを貴ぶ也。
又器物乃新らしきハ穢なく清浄なる事を愛
してなり。されバ君乃求めんとのたまふ古茶碗ハ
むかしより数人の手にわたり。数伴乃口にふれ穢き

て不浄なるものなり。中比都止也と覚えし名
物ハ茶碗ハ。魚店何某が家に畜置し猫ハ碗
なからしを。千両乃道具となりしとかへども。猫乃
飯器を貴人高位乃口にぬるく事礼とせんや。不
礼とせんや。君の求めんとのたまふ茶碗をかく新
らぐひ乃ものなりや測まぞ。これ物をもてあそぶ
ものハ志をうしなふとかや。唐土衛乃懿公ハ
鶴を愛して賢臣を愛せず。狄人衛ハ国を攻

囲む時に。衛の臣下敵をふせがず。常に愛し
たる鶴どもに敵をふせがせよとて。あへて
たゝかはざるゆへに。懿公むなしく狄人に殺さ
れたり。今宗家の古器をぬすみて。金銀にかへしを
給はざるも。懿公の鶴を愛せられしに異る事
なし。茶碗を千金に買んよりは。千金
を出して千万人にすぐれたる器量あるよき手代
をかゝへ給はゞ。此家永久の宝物なるべしと諫む
れば。主人其言に感服して。千金をもつてよき手
代二人をかゝへられば。彼手代忠貞の誠をつくし。
家内無事にをさまり。次第に繁栄せり。伴頭が
一言を永昌通寳とはいふなり

無間鐘事

遠州佐夜の中山観音寺に鐘あり。無間の
鐘といふ。伝へて云。一度此鐘をつくものは。期せず

して金銀あつまりあまりて富貴自在なるのみならず
なり。されども死してのち無間地獄に堕して。
永く成仏の時なしといへり。中坊の住職
此子を地中にうづみかくして。今はなし。此上を踏
そのむも有徳の身となるといひふらしけるに
に貪なるものあり。徒弟なにまかせず。窮困旦暮
身にせまり生涯の憂悩に堪かねば。遠州に
おもむきて。無間の鐘をうづめし地を踏てせめく

一日片時なりとも栄耀に暮しなば足なん。
何ぞ死後の罪障を恐るべきぞと心を決し。
既に遠州におもむく。旅寐の夢に一人の童子
あらはれ告て云。我は汝が望む無間の鐘の精
なり。汝無間の鐘といふ本義を知らざる惑なり。
無用の路銭をつひやし。あやしの旅にくだりしも
笑止さにあらはれて其本義をさとし告るなり。
それ無間とは。無間地獄の無間にあらず。鐘と

は撞鐘の鐘にもあらず。無間の二字は阿鼻ども
なしとよみて。日夜朝暮間もなく。銘々の生産
の道をかせぐ所を。無間と名付。かせぐにたまるぞ。
金銀おのづから涌がごとくあつまる所を。即ち無
間の銀といふなり。しかるに此無智の者此字義
をしらざる。世間愚昧の輩。分限者の名を得
たるものを見ては。其先祖無間の鐘をつきたる
ゆへなりなどいひふらせども。其実は無間のか

せぬによりて。自己の手より涌出る銀なり。諸
行無常寂滅為楽といふごとく。かの鐘をつくさ
んよりは。商売無量。借滅已楽と。でんぎん
ふゑて。銀の音をきゝて。ちやく立身して銭
もうけする所の無間の銀をつき出すべし。一ト度
も此銀をつく人は。永く借銭の苦を消滅し
て。貧苦海のくるしみをのがれ。此世から極楽上
品蓮上の台に座して。無借銭の歓楽に住し

乃難き事ハこれあらんといふとも人ハかき
消てうせぬ。されバ悲見かせざハ子ね肝りこ
おさるて成功をさして。之を實功通寶と
もいふべし

負而勝説

百工商賈ともに負て勝乃利用を知るを第
一義とし。損をおかして益を後に期する計較

を干損ともいふべし。又こゝに富裕なる甲乙乃
二家あり。若よ家代々傳る寶貨あり。一味より互
寶貨をくらべんと既に日を約し。乙が方の手
代まけて勝乃利を工夫して。主人に計策を授
く。二家ともに其寶貨乃優劣によつて上中下
の三品に別つ時ハ。互に寶物をもち出しくら
ぶる時よ至つて。甲が方より上乃寶を出せバ乙が
方にハわざと下乃寶を出して負さす。又甲が

方より中ハ寅を出を吋ハ乙が方に上ハ寅を
出して勝より又甲が方より是非なく下の寅を
出す吋乙が方より中乃寅を出して又勝より
これ猪一度負て後ちに二度乃勝を得る計策
なり。寅を上中下に別る事ハおほど名れども。
用ひ方乃優劣によりて勝負あり。又吉凶に
錢を賣て後世にする事婦乃きのあり。其を備
に此人世をかざりて。新錄屋出来る由へ拙筆に

うつり要を人なしとて。此新錄屋へ行きの多くま
婦ゟ錄ハちると賣要うかるる由人目くにお
とろくまびしくなれば。今ハきやせんうく私く。文政傍
合して家財賣払ひ。吉凶賭礼して行つき次第
ハ旅路に生死をまかせべしとて。一人の甥が方
へいてきひに行て志かしのきのがりに。甥が
云。家財を賣るに殘紫許ありや。弥指貴文あり
とい。甥が云。其錢をいかに吉凶にまきすて

んよりは、指貫文を縁にすてゝ見る人、其ところは、其

縁なる縁を大きくして、別に大仏縁乃かんばんを

出して賣見る人ぢからまけて後に徳乃方

便あるべしといふにまかせ、其さまぐにして賣け

るは、徳乃縁より大きなる事を評判して賣に

あくりの引をまなび、それよりなほ繁昌せ

ず、利をかる事をいれとしより、人の目くぬ

かとて縁を小にきれども、人敢て疑ざるが

つざる事を、俗ににせが大事といふ也。是にお

いて生産其家につとめて、子孫永久の基を

たつれ建久通寳事になし

百年之計

万金乃富家に兄弟の男子あり。其父母を

失て兄弟にあらく、汝等けふによりて富貴の

時を我に見すべしとて、兄弟父母乃余を受

て富貴の計をなすに。弟は一朝にさとえ。兄は
おもへらく。其父兄弟を喚て其所以をさづ
けるに。弟が云。某彼山を切るやいなや。数百の人
夫をやとひて。彼山の木をことごとく薪に切出し
て。売ば忽ちに多分の利を得て富て
又兄が云。某は弟が言とは太に違
へり。某は彼山の一本をもみだりに切ら
ずして。箇芋樸樕海柳なんどの大木にな
しむる木を切る。松杉栢の類は。数十年の後
には大木となる。株梁の用になるべき木を切
ず。其間の年数を待て大利を得んとおもふ
也。今にしては富べき子細はなけれども。其
父聴じて云。兄弟の所存を聞に。急
の便宜あり。弟は今富といへども。後は貧しからん。
兄は今まづしといへども。後は富貴の身となる
べし。其故は日をとりて計れば。薪に切出して。

売の利徳は速なれども。年を以て計れば。大木と成
を待て。林果の用に売出されば。薪の価よりは
百双倍の利徳あり。然るに薪に切尽して大木と
なるべき林木をも抜ざれば。山の諸木切あらして
将来の生産を考ふべき事後には貧しかるべき事
を志れり。又は大抵を重し用ある道を志るが
少くに。目前の小利をすてゝ。後日の大利を得
べき計較なれば。今は万事にまびしと云ども。

後々は富貴になるべき事を志るといひ
がたきして其根のおこし。されば人の生産の
道を志れるに。此心得を千両とし。一銭むな
しからぬよく一銭を中守る道を志れば。
百銭にいたるべし。百銭のつゐやすひを出して。百
貫にすゝ千貫に伸ぶ。一銭を中弥さと
てかになし。おごりをもふき。倹約をまもるれ
二ろに至るも。億に一銭も小利のちしくれと以

利を忽略にせずして。損がなきをまもらると
以利を絶すべし。瑞慶通寳にはあら
んや

待則甘露

からきを賣ものあり。数月の旱にあひて。から
きもきざれば。酒造屋に商賣をさしとめ
んとせし。計金子これを深て云。汝は先祖より

からきを商賣なさしめて。今日まで其身
を達来せり。志かれば。からきは汝が家の生産
にして。おろそかにすべき事に非ず。今しのばれ
時をまちて。富ある時をまたれよ。それ良
農は水旱のなやみに耕をやめざれど。良賈は折
閲をかへて市をとざすといへり。猶く家につ
くまる事の居業に於て。皆時の不賈あり
といへども。此場を踏ためて他の事になさず。

よき時をまつて家業をなすを良賈といへり。俗に所謂石の上にも三年とハ事にかんにんをいましめあり。天道をおそるゝならば。日和の時あり。雨の日あれば。世間の事何ぞ不変乃常をしりて論ぜんや。むかし呉国に猿をかふ者ありけり。十年の後にあつまりしかば。其時山にはなちけるに。かの猿ハ山をうけり出。木末を傳ひて食をもとむる道をわすれたるゆへに饑つかれて死しけり。これ猿の山にそだちながら食をもとむる乃家業を忘れたるゆへなり。今汝がからうさを止めて。他の商賣にうつしかへんとするも。彼猿のむかし乃ならひをわきまへざるにひとしかるべし。既に古人も說く乃生業をうしなふ事をいましむ。汝志をかへずして商賣に安んじて。おこたる事時をまつべし。かならずしも商賣を移すを学

なかれ。天道に叶ふが故に及んで。かへつて其
妄ならざる事をなさん。故に世の諺にも。志
らぬ金高売よりよく売る小ぬか高売に
あまさへなるべし。かへつてさして寄元通宝とは
いふべし

器量之程

人は器物のごとし。たとへば一升を入るゝの器

中あり。穀百石を入る腹中あり。乃至千万斛
を入るゝ胸中あり。よつて器量といふ。俗諺に
云これ程の世をふるといふ事も。ただ人の器量
は大小広狭によつて境遇は異なる所をいふ
なるべし。ここに装束を売るものあり。或る家業に
て一枚のほうらくを売によつて困り田て云。
一枚はいかなる商ひは利をとりて。かくまづしき禍
祐にあふや。ある人これに云。我商ひは…

ちぐ利て銭ほそし。千貫乃ねまてハづかよ百銭
乃利をゆく生産とせ。別よ手段なし。むかう
らく賣三歎して申せど。あらじおやこそその
丈を同數堪賣が云まれ其の辛労いくばく
なりんとおもれむ不なり。千貫乃あきなひまそ
ハづかよ百銭乃利をゆんとて。おけられ乃苦労
をそらひやれば。かなしむよくせらぞ。さてし細
さ商賣なり。某が數堪いこ。銭よ買て云銭

よ賣て生産となすを。一倍乃利て銭あり。これよ
よらく千貫乃ねまて。千貫乃利徳をゆるお
きおひまてありながら。むかし其日をおくるを
よろづ。其乃あきないハ千貫まてハづか百銭乃
小利をゆるすから。けづく福徳よくらしかふ
事。誠よおやしくれとらへバ。おろし乃云。大凶いふ
壊をえらハざる丈人よ。其高き事をなし。大
川のの泝くとながれこそ源ハわづかなる谷の滴

此あつまる也なり。銭とてもはじめより福徳
まれあらで。微銭より起きして。百銭乃利をう
貫乃目よりかくもる事を倹約せしまでく。
志かれども毎日数万貫乃あきなひをかつて乃
也人に。百銭乃志でまるとあつむる大河となせる
勢ひ出む時なり。足下のあきなひは一倍の太
利あるがごとくなれども。千貫乃あきなひをせる
きば。抑その一年半此日数に依りて。弐百余

日なるりまして。我が毎日乃あきなひもさるぞ
てにおいて見れば。大利は反てわが小利の十分
一にもおよばずと。貧富の境界殊なるもこれ
によるべし。大く乃中に此小利は依りる所に寄
をはさし。小く此中に大利は依る所にかくぎ
事あり。志からば貧婦乃一倍。何ぞ富家をも得
んや。かくて千貫の小利を出して人をるれば。彼
ほうらく売然入なりおどろき。色を変じてわ

一執ゝ千両の金を以て色を変ずる事ハ太
縁通寒乃窓螢なき事あらざれ里